

自由研究発表

現代インドネシア文芸の新しい展開

・ エカ・クルニアワン(Eka Kurniawan)とその小説から・

A New Dimension of Indonesian Literature: Eka Kuruniawan and His Novels

梅垣 緑 (一橋大学社会学研究科)

UMEGAKI Midori (Hitotsubashi University)

近年、インドネシアでは新しい世代の小説家の活躍が著しい。2022年にはノルマン・エリクソン・パサリブ (Norman Erikson Pasaribu) による「Happy stories, mostly (原題 *Cerita-cerita Bahagia, Hampir Seluruhnya*)」がブッカー国際賞のロングリスト (一次選考リスト) にノミネートされた。これは2005年にブッカー国際賞が創設されて以来、インドネシア人作家の小説としては2作品目のことであり、セクシュアル・マイノリティの当事者「クィア小説」とも評される作品が登場し、国際的評価を獲得するのはインドネシアにおいては新しい出来事だと言えるだろう。

その他にも2000年代以降によく知られるようになった一連の作家たちとして、「スーパーノヴァ」シリーズで知られるディー・レスタリ (Dee Lestari)、小説「サマン (Saman)」やその続編「ラルン (Larung)」などで知られるアユ・ウタミ (Ayu Utami)、タブーとされてきた政治的表現に切り込む「帰郷 (Pulang)」「海は語る (Laut bercerita)」で知られるレイラ・S・チュードリなどがある。これらの小説家は、「レフォルマシ」時代の新しい文芸市場と読者層を切り開いて精力的に作品を送り出し、それ以前のインドネシア社会の政治的正統性に疑問を投げかけてきた。そしてこれらの作品の多くに共通する特徴として、スハルト体制の抑圧と暴力といういわばパブリックな問題群に感情的結合としての家族、セクシュアリティ、ジェンダーなどいわゆる「親密圏」の視点を挿入していることがある。

本発表では、特にその中でも優れた作品を残しているエカ・クルニアワン (Eka Kurniawan) の作品を取り上げ、2000年代以降の文芸表現の広がり具体的な内容に注目する。エカ・クルニアワンは2002年に最初の長編小説「Cantik itu Luka (美は傷)」を発表してデビューすると、2004年に「虎男 (Lelaki Harimau)」を発表。これらの作品は2015年に英訳されて英語圏に紹介されると大きな注目を集め、Verso社から出版された「Man Tiger (Lelaki Harimauの英訳版)」が2015年のブッカー国際賞ロングリストにノミネートされた。本発表では、植民地期からスハルト体制にいたるまでの暴力的経験や、そうした暴力がジェンダーやセクシュアリティと交差したときに生じる非対称性などに注目して彼の作品の内容を読み解き、現代インドネシアの小説がスハルト体制をはじめとした過去の政治体制とその暴力をどのように捉えなおそうとしているのか、その新しい試みが開く可能性について考察する。